慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	万葉羈旅歌論
Sub Title	
Author	梶, 裕史(Kaji, Hiroshi)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1988
Jtitle	三田國文 No.9 (1988. 6) ,p.1- 15
JaLC DOI	10.14991/002.19880600-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19880600-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

万葉羈旅歌論

梶　裕史

一

「羈旅」という語は、同義の漢字を連ねて「たび」の意を表わした熟語である。この熟語は、記紀には使用例がなく、古代の文献では殆ど『万葉集』の題詞にだけ見出される。それで『万葉集』の旅の歌を、今日一般に「羈旅歌」と称している。

とりあえず、その「羈旅」の用例の点検からはじめてみよう。

①柿本朝臣人麻呂羈旅歌八首（巻三　二四九～二五六題）
②高市連黒人羈旅歌八首（巻三　二七〇～二七七題）
③羈旅歌一首幷短歌（巻三　三八八～三八九題）
④……羈旅邊城に懐古舊に而傷し志……（巻五　八六四～八六七の序をなす書簡中）
⑤羈旅作（巻七　一一六一～一二五〇題）
⑥羈旅歌（巻七　一四一七題）
⑦羈旅發し思（巻十二　三一二七～三一七九題）
⑧天平二年庚午冬十一月大宰帥大伴卿被し任大納言上京之時、傍従等別取海路入し京。於是悲傷羈旅、各陳所心作歌十首（巻十七　三八九〇～三八九九題）

以上の八例がそのすべてである。このうち「羈旅」の語が純粋に歌の標題たり得ているのは、①②③⑤⑥ということになろう。（⑦を除いたのは、発し思の二字に題の眼目があると考えるからである。）

こう見渡してみると、直ちに気付かれることがある。それは、『万葉集』中に旅の歌は非常に数多いのに対して、「羈旅歌（作）」という題のもとに集められた歌の数は、意外なほど少ないということだ。標題として、「相聞」「挽歌」のように大きな部立名に使用された例が見当らない。いずれも、小さな分題標目にとどまっている。⑤などは九十首を抱えているが、それでも巻七のなかでは、「雑歌」という大部立に所属する一小題にすぎないのである。

となると、「羈旅歌」という成語を想定してみた時、それは、旅の歌すなわち「羈旅歌」と置きかえられるような通用性は有していなかった、と予想される。どんな旅の歌でも広く「羈旅歌」と考え、たまたま題詞にはわずかな使用例しか残さなかった、というこ

とではないように思える。

では、どのような旅の歌に「羈旅歌」の題が与えられたのか。編者の命名意識を探ってみたいと思う。

さしあたり⑤より、「羈旅」の語に持たれていた概念を知る手がかりが得られる。というのは、⑤の前にも旅中作とみえる歌がならぶのであるが、編者は題を「羈旅作」とはせず、「芳野作」（五首）「山背作」（五首）「摂津作」（二十一首）としている。一方⑤の九十首中、地名を保有する歌からそれぞれの詠地を推測すると、多く畿外に出ることが判明する。すなわち、

Ⅰ　畿外への旅を「羈旅」と考えていた。

と察せられるのである。この点は他の七例の地名保有歌について調査しても、ほぼ同様の結果が得られる。したがって、まずは有力なめやすの一つとみてよかろう。

今は主に題詞の比較によって、この外にも補足できそうな事柄を考えてみる。

○行幸従駕のように旅の事情が明らかな場合、歌の題詞は「……天皇幸二地名一時、作者作歌」のような形をとっている。最初に「□へ行った時」と明記するため、重ねて旅と言う必要もないというわけか、そこに「羈旅」の語がはいった形は見当らない。たとえば①は、多くが瀬戸内海の船旅から生まれたと思われる歌々である。ところが同じ巻三に、同様の旅の歌が別に二首あり（三〇三・三〇四）、こちらは「柿本朝臣人麻呂下二筑紫國一時海路作歌二首」と題されている。行幸従駕歌ではないが、旅の事情が判明しているからこのような題詞が付いている。これに対して①は、制作事情が忘れられた歌々だったと考えてよい。

○歌の内容に少し立ち入ってみると、旅の歌であっても、「家なる妹」への思慕の色あいが濃い歌は、相聞に編入されることが多い。また行き倒れ（行路死人）をうたった歌は、挽歌に入れられている。たとえば巻十二（古今相聞往来歌類之下）に収められた⑦五十三首などは、前者の好例といえる。「羈旅發思」と羈旅の語は用いているが、題の眼目は、先に述べたように發思の二字にあるとみていい。集められた歌の性格を考慮して、編者は、単に「羈旅歌」と題する場合とは異なる分類意識を標榜したものと思われる。この外、同じ歌人の旅の作が所属をさまざまにした例として、次のような典型もある。

a 柿本朝臣人麻呂従二石見國一別レ妻上来時歌二首并短歌
（巻二　一三一～一三三題）

b 讃岐狭岑嶋視二石中死人一柿本朝臣人麻呂作歌一首并短歌
（巻二　二二〇～二二二題）

aは相聞、bは挽歌に配属されている。この二例は旅の事情が明記されているが、一方それが判らない「羈旅歌（作）」（①②③⑤⑥）の所属をみると、⑥（巻七挽歌）をのぞいて「雑歌」である。⑥にしても、次のような歌になっている。

名兒の海の朝こぎくれば海中に鹿子ぞ鳴くなるあはれその水手
（7・一四一七）

挽歌らしくない歌であり、(1) これが巻末歌であることから判断して、⑤の追補とみるのが妥当であろう。「羈旅歌」という標題は、

「雑歌」中の歌に付与されるのが原則であったと考えられる。

○「作者 羈旅歌」という題詞の形は、①②の外に見当らない。すなわち残る③⑥は作者不明であり、⑤、あるいは⑦の歌群まで含めて考えても、同様のことが確認される。（③の左注にはそのことを記して「右歌若宮年魚麻呂誦レ之　但未レ審二作者一」とある。）すると作者不明という点に一つのめやすがあったとも思われる。①②は、制作事情が忘れられて作者のみ記憶されていたケースと思われるが、類例を調べてみると、題はいずれも「作者作歌……首」のような単純な形をとっている。そこで整理して考えると、「羈旅歌」の題は作者不明の旅の歌に与えるのを原則とし、①②の例はきわめて特殊なケースであると見なしてよいであろう。

以上のことに前述Ⅰを加えると、およそ次のようなめやすが立てられる。

Ⅰ　畿外への旅で詠まれた歌
Ⅱ　旅の事情・作者ともに忘れられた歌
Ⅲ　歌の内容が相聞や挽歌に傾かず、旅中作らしい歌

ただしこの三点は、異なる巻々に分布する「羈旅歌（作）」の用語を、すべて同質と仮定したうえで導かれたものである。『万葉集』の各巻が、同一の編者により一度に成立したはずはないとすれば、巻三の「羈旅歌」三例（①②③）・巻七の「羈旅作」（⑤）・「羈旅歌」（⑥）各一例は、それぞれ語の使用意識に微妙な相違があると予想してかかることも必要であろう。

しかし一応、右のⅠⅡⅢのすべてを満たすような歌が、「羈旅歌」と題される資格を持っていたと考えておく。

結局、『万葉集』の旅の歌全般を「羈旅歌」と呼ぶのは――小稿でもその慣例に従うが――まったく今日の研究者の便宜であると知るべきであろう。つまり、どんな旅の歌でも「羈旅歌」で通用したのならば、旅の歌はふんだんにあるのだから、たとえば巻名あるいは大部立の名を「羈旅」とし、個々の歌にそれぞれの履歴を示す題詞を付す、といった体裁がとられてもよかったはずである。しかるにそういう形跡が無いということは、「羈旅歌」と言った場合、編者は或る傾きをもった旅の歌の姿を印象していたと推察し得るのである。

その偏向を知るために、次にはⅢの傍線部「旅中作らしい歌」の内容を、具体的に明らめていこうと思う。

二

羈旅歌の特色を抽出するに格好な歌群といえば、まず九十首を有する⑤（巻七羈旅作）があげられる。すでに阿蘇瑞枝氏[2]・蜂矢宣朗氏[3]などが、この歌群を資料として様々な分析を行われているが、小稿はまた別の角度から、この歌群が通有する傾向を探ってみたい。（なお紙数の関係上、九十首すべての掲載は省略させていただく。）

まず、普遍の傾向として第一にあげられるのは、地名を含むということである。該当歌は六十首に達する。地名は「固有名詞プラス地形名」の形で詠み込まれている場合が多い。円方の湊（一一六二）、丹生の川（一一七三）、鹿島の崎（一一七四）、鞆の浦廻（一

一八二・一一八三)、名子江の浜辺(一一九〇)、糸鹿の山(一一一二)、黒牛の海(一一一八)などの如くである。このような様相は当然のことかもしれないが、

潮早み磯廻に居れば潜する海人とや見らむ旅行くわれを
(一二三四)

あしひきの山行き暮し宿借らば妹立ち待ちて宿貸さむかも
(一二四二)

のように、地形名だけあって固有名詞の欠落した歌であっても、現代人には旅の歌として自然に受容できる。ところが「羈旅作」九十首中に、地形名だけという歌はごく少ない。ということは、古代にあって或る地勢(風物)は、その土地固有の顔として、つねに地名をともなって感受されていた。だから地名ぬきで或る土地をうたうことには非常な異和感があったのだ、とこう推察できるだろう。

しかも地名には、しばしば枕詞・序歌がつきまとっている。なかには、或る地名が別の地名の冠辞の役割を果たしているというケースも見受けられる。「紀の国の雑賀の浦」(一一九四)「若狭なる三方の海」(一一七七)「高島の三尾の勝野の渚」(一一七一)などのように、その土地が所属する国名あるいは近隣の地域名を先にたてて、周到にうたい込むのである。このような例が九首にみられる。※

また、枕詞・序歌をともなう場合も含めて、地名から詠みおこされている歌が三十五首に及ぶ。地名を二つ以上含む歌もあり(※の場合をのぞく)、これは五首数えられる。

見知らぬ土地を訪れた記念に地名を詠み込むこと、これはごく自然な発想のように思える。それにしても、三十一音と限られた音節のなかに地名を二つも三つも入れたり、あるいはことさらに地名から発唱したりする意識は、もはや現代人の詩作の常識の圏外にあることといってよいだろう。

未通女らが織る機の上を真櫛もちかかげ栲島波の間ゆ見ゆ
(一二三三)

こんな歌は、図式化すれば「序歌 地名が波間に見える」というだけである。内容は無に近い。また、この歌群の歌ではないが、

わぎもこに猪名野は見せつ名次山角の松原いつか示さむ
(3・二七九 高市黒人)

高島の安曇の港を漕ぎ過ぎて塩津菅浦今か漕ぐらむ
(9・一七三四)

こうした地名づくしのような歌が、古代では一人前の短歌と認められている。作者にとっても編者にとっても、何か意義があったからこそこのような歌が詠まれ、『万葉集』に収められもしたのだと考えるほかない。歌聖・人麻呂にしてから、同類の歌を制作している。

玉藻刈る敏馬を過ぎて夏草の野島の崎に船近づきぬ
(3・二五〇 前掲①中)

枕詞プラス地名で二十音近くも費している。この一首、枕詞の生かし方に人麻呂らしさを認め、それなりの詩情を汲みとる向きもあるようだが、やはり内容の乏しさは否定できないだろう。人麻呂の羈旅歌八首(前掲①)といえば、黒人のそれ(前掲②)とともに、万葉羈旅歌の円熟を伝える作品として名高い。そのなかに未だこのように無内容とも思える歌を含んでいるのは、注目に値しよう。

旅人が歌を制作するにあたって、地名は以上のように重視され、しばしば作歌の主眼にさえなったのである。

さて次に、九十首から抽出されることとして、「見」という語を含む歌の目立つことをあげたい。一人称の現実の行為ととれる「見」を含む歌は、二十一首数えられる。そのうち「見れば」ないしは「見渡せば」という詞句をもつ歌が三首、「見ゆ」の形で一首を結んでいる歌が八首。前者・後者を両有する歌も二首ある。

紀の国の雑賀の浦に出で見れば海人の燈火波の間ゆ見ゆ　（一一九四）

磯に立ち沖辺を見れば海藻刈舟海人漕ぎ出らし鴨翔る見ゆ　（一二二七）

旅に出た時、ふつう最もよく働かせる感覚器官は目であろう。だから「見」の語を含む歌が多いのは当然かもしれない。しかし、

家離り旅にしあれば秋風の寒き夕に雁鳴きわたる　（一一六一）

天霧らひ日方吹くらし水茎の岡の水門に波立ちわたる　（一二三一）

のように、「見」の語が無くとも叙景歌は成りたつ。すると積極的に「見る」姿勢は、やはり注目すべきではないか。歌の制作にあたって、「見る」行為を強調、あるいは確認しようとする意識があったことを窺うべきであろう。

第三に注目したいのは、「出」「過」「行」「越」などの語を用いて、旅行者の道程の経過を意識にのぼらせている歌々の分布である。

○霰降り鹿島の崎を波高み過ぎてや行かむ恋しきものを　（一一七四）

○印南野は行き過ぎぬらし天つたふ日笠の浦に波立てり見ゆ　（一一七八）

○荒磯越す波をかしこみ淡路島見ずか過ぎなむここだ近きを　（一一八〇）

○網引きする海子とか見らむ飽の浦の清き荒磯を見に来しわれを　（一一八七）

○舟泊ててかし振り立てて廬せむ名子江の浜辺過ぎかてぬかも　（一一九〇）

○紀の国の雑賀の浦に出で見れば海人の燈火波の間ゆ見ゆ　（一一九四）

○妹に恋ひわが越え行けば背の山の妹に恋ひずてあるが羨しさ　（一二〇八）

○妹があたり今ぞわが行く目のみだにわれに見えこそ言問はずとも　（一二一一）

○足代過ぎて糸鹿の山の桜花散らずもあらなむ還り来るまで　（一二一二）

○安太へ行く小為手の山の真木の葉も久しく見ねばこけむしにけり　（一二一四）

○ちはやぶる金の岬を過ぎぬともわれは忘れじ志賀の皇神　（一二三〇）

○玉くしげ見諸戸山を行きしかば面白くしていにしへ思ほゆ　（一二四〇）

○ぬばたまの黒髪山を朝越えて山下露に濡れにけるかも　（一二四一）

○見渡せば近き里廻をたもとほり今ぞわが来る礼巾振の野に　（一二四三）

以上十四首、経過の叙述の郎分を傍点で示してみた。これを整理すると、およそ次の二様に分類されるだろう。

ⓐ現在地をよりどころに、今まで辿ってきた（あるいは今後の）道筋を想起する。

ⓑ現在、或る土地を通り過ぎていく（しばしば、通り過ぎるのが惜しい）ということを述べる。

ⓐは、一一七八・一二一二のように、過ぎてきた地名㊀を出し、続いて現在地名㊁を出すという形を典型とする（地名は□で囲って示した）。㊀㊁いずれかが欠けていても、「やって来た」こと――過去に継続する現在――を意識する旅人を感じさせることが、この類の特徴である。

ⓑも、一一七四・一一八〇に代表されるように、必然的に地名をともなう。

この ⓐⓑを通じていえることは、作者が旅人であるみずからを動態的に描こうとしているということである。さらに気付かれることには、前掲十四首には、先に触れた「見」の語を含む歌が少なくない（該当する詞句には傍線を付しておいた）。該当詞句をもたない歌でも、明らかに「見る」行為の結果生まれたか、もしくは「見る」行為を期しているとみられる場合が殆どである。

ここまで来れば、次の三点が相互に深く結び合っていることが認められよう。

A地名の保有
Bつとめて「見る」こと
Cみずからの旅を動態的に描くこと

するとそこから、一つの基本的な旅中作の類型が浮びあがってくる。

〈地名に至って（通過していくにあたって）……を見る〉――X

すなわち、道すがらつとめて「見る」行為をおこなうとともに、つねに過ぎてきた土地への顧慮を忘れずに旅を進めてゆく。そんなみずからの姿を歌にする、という発想のありようである。このXの型は、実は伊藤博氏がはやくに示された羈旅歌の基本発想の構図にほぼ重なるものであるが、伊藤氏が題詞の類型に着眼されたのに対し、小稿ではまた別の過程をふみながら、同様の結論に辿りつき得たものと思う。

こうして巻七羈旅作九十首の分析から、私見では、前述ABCの三要素の組み合わせによって、旅中作の骨格が形づくられていると考える。Xはその典型を示そうとしたものである。

これを前章での考察と連絡させれば、このような骨格をもった歌で、かつI（詠地が畿外）II（作者・制作事情未詳）にも相当する歌に、編者は「羈旅歌」を印象していた、とこのような見解に帰着する。しかし、これでもまだ十分ではない。本章での考察は、主として歌の形態面に関してである。最も肝心なこと、すなわちその器に盛られる精神面の偏向を探る、という課題が残っている。

三

後期飛鳥王朝が律令体制を整えようとする頃、交通の整備にともなって、都と諸国の間では官人の往来が盛んになっていた。またこの時期には、持統天皇のように頻繁に行幸を催される統治者も現れている。こうした旅の機会の飛躍的な増大が、万葉羈旅歌の成立に大きくあずかったことは確かであろう。

しかしながら、前章で指摘したような羈旅歌の骨格が、この頃にわかに形成されたとは到底考えられない。利用されるべき型が前代から用意されていたにちがいない。そして、その形態面の先行要素を指摘することはそうむずかしくない。

まず前述のAとCとを組み合わせて、その源を考えてみる。するとすぐに思いあたるものがある。記紀歌謡に多くみられる道行の詞章である。「(枕詞)地名を過ぎ……」というフレーズを繰り返してゆくその詞章にならい、短歌様式にあわせてそれを短縮してゆく。人麻呂の二五〇番歌(前掲)のような姿は、こうして誕生したものと思われる。

次にAとBとを組み合わせて考えると、これも容易に、国見歌の形式を踏襲しているであろうと見当がつく。「地名に立って見渡すと……が見えることだ。」この構成をとり入れてやはり短縮化すれば、先に引用したような一類の歌々が得られることだろう。

このように羈旅歌は、記紀歌謡の道行詞章や国見の詞章の手法を大きくとり入れた形跡をみせている。ABCの三要素は、つまりそれだけ古い歴史をもつとみられるのである。

そこで遡って、ABCの要素が根付いた由縁を考えてみる。これには既に多くの研究があるので、[5] ここではごく簡単に記すにとどめるが、第一に地名は土地ごとの神名に等しかった。旅人はその名を発唱し、土地の風光を讃めることで、そこに坐す神への挨拶に代え、無事に通過させてもらうことを願った。第二に「見る」ということも、それによって霊魂の充実をはかり、旅中の健康を保とうとする行為であった。つまりいずれも、旅中の無事健康を祈って鎮魂をはかろうとする心意に基いている。故郷を離れて異郷に足を踏み入れることが、畏怖と不安の心意に満たされていた時分、ABCの要素は、このような実用性をもって浸透していったものと推察されるのである。

それでは、羈旅歌の主題は鎮魂(主として「たましずめ」)にあった、というのみで済まし得るかというと、もちろん不十分であろう。鎮魂は旅の歌の発生当初の目的であって、そこに力点を置くのは小稿の眼目ではない。羈旅信仰は根強く持続したにしても、小稿で特に探りたいのは、文学としてみた場合、羈旅歌は精神的に何を獲得したのかということである。それも中国文学の影響はぬきにして、在来種の成育を見透したい。旅に出た万葉びとの心の起伏は、どのような歌境を導いたのであろうか。

四

万葉びとの旅には、大別して次の二つがあったと思われる。

(1)行　幸

(2)右以外の旅

(2)について具体的に考える。万葉びとは本質的に「なりはひの民」[6]であった。だから現代のような自発的な旅には無縁であったろう。まずは「大君の命かしこみ」と、公の任務を帯びた旅が殆どであったと考えられる。つまり(2)は、官人の旅を中心に考えればよい。この外、防人の旅なども(2)に含めてよいが、それとて強いられての旅だったことに変わりはない。

この(1)(2)それぞれの旅行環境を思い遣ると、まず(1)は、比較的好条件に恵まれた旅であったと推察される。それに対して、(2)に艱難辛苦をともなう旅が多かったであろうことは、想像に難くない。それで、(1)で詠まれた歌には明るい心象を感じさせる歌が多く、(2)からは陰影を帯びた歌が生まれ易かった、とこう対照して予想するのは自然であろう。実際、行幸従駕歌には、たしかに明るい歌が目立つ。

しかし私見では、ゆとりのある旅だったから明るい歌が出来易かった、という理解のしかたは、必ずしも適切ではないと考える。天子という神に近い尊貴の方が巡幸される。そういう晴れの時を下々まで共有する。となれば、その目的地が都の近くであろうと「天離る鄙」であろうと、その旅はめでたいものでなければならなかった。だから実際の行程の苦楽に関わらず、約束として、旅を讃美する歌が制作され易かった、とこう考えるべきであると思う。

巻六に、聖武天皇の難波行幸の時（神亀二年）の歌として、次のような長歌反歌がある。

冬十月幸二于難波宮一時笠朝臣金村作歌一首并短歌

押し照る　難波の国は　葦垣の　古りにし郷と　人皆の　思ひ息み
て　つれも無く　ありし間に　績麻なす　長柄の宮に　真木柱　太
高敷きて　食国を　治めたまへば　沖つ鳥　味経の原に　もののふ
の　八十伴の緒は　廬して　都なしたり　旅にはあれども
（6・九二八）

反歌二首

荒野らに里はあれども大君の敷き坐す時は都となりぬ
（6・九二九。九三〇番歌は省略）

行幸従駕の者の心境を実によく表わした歌であると思われる。

ところが、行幸中に詠まれた歌の内には、次のような歌も見出される。

幸二讃岐國安益郡一之時軍王見レ山作歌

霞立つ　長き春日の　暮れにける　わづきも知らず　むらぎもの
心を痛み　鵠子鳥　うらなけ居れば　玉だすき　懸けのよろしく
遠つ神　わが大君の　行幸の　山越す風の　独り居る　わが衣手に
朝夕に　返らひぬれば　大夫と　思へるわれも　草枕　旅にしあれ
ば　思い遣る　たづきを知らに　網の浦の　海処女らが　焼く塩の
思ひぞ焼くる　わが下ごころ
（1・五）

反歌

山越しの風を時じみ寝る夜落ちず家なる妹をかけて偲ひつ
（1・六）

潮騒の伊良虞の島辺漕ぐ船に妹乗るらむか荒き島廻を
（1・四二。「幸二伊勢國一時留レ京柿本朝臣人麻呂作歌」）

何処にか船泊てすらむ安礼の崎漕ぎたみ行きし棚無し小舟
（1・五八。「（大宝）二年壬寅太上天皇幸二于参河國一時歌」。高市黒人）

慶雲三年丙午幸二于難波宮一時
志貴皇子御作歌

葦辺ゆく鴨の羽がひに霜降りて寒き夕は倭し思ほゆ　（1・六四）

大行天皇幸二于難波宮一時歌

大和恋ひ寐の寝らえぬに情なくこの渚埼廻に鶴鳴くべしや　（1・七一）
右一首忍坂部乙磨

玉藻刈る沖辺は漕がじ敷妙の枕の辺忘れかねつも　（1・七二）
右一首式部卿藤原宇合

幸二志賀一時石上卿作歌一首

ここにして家やも何処白雲の棚びく山を越えて来にけり　（3・二八七）

印南野の浅茅押なべさ寝る夜の日長くあれば家し思はゆ　（6・九四〇）

明石潟潮干の道を明日よりは下咲ましけむ家近づけば
（6・九四一。以上二首「（神亀）三年丙寅秋九月十五日幸二於播磨國印南野一時」。山部赤人）

天皇の行幸のまにま吾妹子が手枕まかず月ぞ経にける
（6・一〇三二。「（天平）十二年冬十月……幸二于伊勢國一之時」。於狭殘行宮。大伴家持）

行幸の先々、屈託ない歌ばかりが詠み連ねられたわけではなかった。類型的ではあるが、旅愁を滲ませた歌も制作されたことが知られよう。九四一番歌などは、心踊りを表白した歌であるが、故郷への帰路を喜んでいるわけであるから、裏を返せば、それまでの旅の苦労を底に伝える歌ということにもなる。長歌は「やすみしし　わが大君の　神ながら　高知らします　印南野の……あり通ひ　見ますもしるし　清き白浜」（九三八）と、行幸地の風光を讃めている。その反歌としては、場所のみならず、九四〇番歌とともにその気分も不調和な歌であるといえよう。

しかしこうしたケースは、作者の不注意というわけではないだろう。行幸は晴れがましいものとの心得が当然の約束であったならば、そのような了解のある歌の場で、あえて虚構として旅を嘆く歌を披露する。そしてそれを皆で享受するということも許されたはずである。ゆとりのある旅が可能だったとすれば、故意にみずからを憂愁の旅人になぞらえる、といった趣向は、むしろ旅先の宴席でもてはやされたかもしれない。ただ、そのようにして詠まれた歌が「行幸歌」と題されることは少なかった。そのため、明るい歌ばかりがあるように印象されるのだ、とこうも考えられるのではないか。

要するに、旅の苦楽がそのまま歌に投影して、「明」「暗」の色調を左右するという見方では、文芸は理解できないであろうということだ。

この視点で、今度は行幸従駕歌以外の旅の歌をみてゆく。予想通り、憂いを帯びた歌が数多く見出される。それらの内には、もちろん、悪条件の旅の実感から生まれた歌も多いだろう。が私見では、

その実感から触発された或る感銘が、より根源的な作歌の刺激となったのではないかと考える。その感銘とは、語り伝えられていた先人の旅への共感、遠い祖先の旅の追体験、という心の動きである。

記紀に書き留められた神代・皇祖初代（神武天皇）の伝承をみると、大和宮廷の祖先は、地上の理想郷「やまと」に定着するまでに、幾多のさすらいの旅を繰り返してきた印象を留めている。天上から地上へ、そしてこの国土では安息の地を求めて。また、若く美しい神、あるいは神に近い貴人が受難の旅をする——悲劇的になると、ついに辺土で果てる——という物語も、数多く記紀に盛り込まれている。須佐之男命。大国主神。山幸彦。本牟知和気王。円野比売。倭建命。軽太子と衣通王。……これらの話は、いつ頃の出来事と歴史意識をもって記憶されていたというよりは、時間を越えて、日本人の原像の一つとして、人々の胸に滲み着いていたにちがいない。

そしてこれは、宮廷の伝承のみにとどまらない。『風土記』をみると、諸国の村々も、その昔苦しい旅をして村を訪れ、恩恵を施してくれた神あるいは貴人の伝承を有していたことが窺える。

たとえば『丹後国風土記』逸文、奈具の社の神の鎮座由来譚などは、その面影をよく残している。比治山の頂にある「真名井」という泉に、ある時、一人の天女が水浴に降りてきた。ところが山麓に住む老夫婦「和奈佐おきな・和奈佐おみな」に衣を隠され、彼女は天に帰るすべを失ってしまった。それでやむなく老夫婦の家に身を寄せ、「相住むこと十餘歳」の間に、数々の善行を施す。にもかかわらず、天女はやがて、富を得て心奢った夫婦に追い出されてしまう。天女は途方にくれた。

……天女、涙を流して、微しく門の外に退き、郷人に謂ひけらく、「久しく人間に沈みて、天に還ることを得ず。復、親故もなく、戻らむ由を知らず。吾、何にせむ、何にせむ」といひて、涙を拭いて嗟難き、天を仰ぎて歌ひしく、

天の原　ふり放け見れば　霞立ち　家路まどひて　行方知らずも

遂に退き去きて荒塩の村に至り、即ち村人等に謂ひけらく、「老父老婦の意を思へば、我が心、荒塩に異なることなし」といへり。仍りて比治の里の荒塩の村と云ふ。亦、丹波の里の哭木の村に至り、槻の木に據りて哭きき。故、哭木の村と云ふ。復、竹野の郡船木の里の奈具の村に至り、即ち村人等に謂ひけらく、「此處にして、我が心なぐしく成りぬ（細注：平善をば奈具志と云ふ。）」といひて、乃ち此の村に留まり居りき。斯は、謂はゆる竹野の郡の奈具の社に坐す豊宇賀能賣命なり。

（『丹後国風土記』逸文　奈具社の条）

この話は、最後が「（天女は）此の村（奈具）に留まり居りき」と結ばれている。結局、再び肉体をもっては天上に帰れなかったわけだ。神であるから「死」とは語られていないが、これを現身の人間に移せば、異郷での死ということになる。悲劇的な結末である。この類で最も哀切なのは、『古事記』の倭健命譚であろう。丹後の天女と同様、心からの献身・奉仕がむくわれず、蛮族征討の苦しい旅を続けた末、ついに伊勢の能煩野で、

倭は　国のまほろば　たたなづく　青垣　山ごもれる　倭しうるはし

という偲国歌を残して薨ずる。

このヤマトタケルが、『常陸国風土記』では、村々にささやかな幸福を授けては去ってゆく聖なる旅人、という印象で語られている。

○郡の東十里に桑原の岳あり。昔、倭武の天皇、丘の上に停留まりたまひて、御膳を進奉りし時、水部をして新に清井を堀らしめしに、出泉浄く香しく、飲み喫ふに尤好かりしかば、勅したまひしく、「能く渟れる水かな」（細注：俗、與久多麻禮流彌津可奈といふ）とのりたまひき。是によりて、里の名を、今、田餘と謂ふ。

（茨城郡）

○行方の郡と稱ふ所以は、倭武の天皇、天の下を巡狩はして、海の北を征平けたまひき。是に、此の國を經過ぎ、即ち、槻野の清泉に頓幸し、水に臨みて手を洗ひ、玉をもちて井を榮へたまひき。今も行方の里の中に存りて、玉の清水と謂ふ。……

（行方郡）

こうして、さすらいの貴人（神）の姿は、広く人々の心に、案外身近に、敬慕の念をもって記憶されていたことがしのばれる。それでは、そういう祖先の旅の苦難を、最も実感できたのはどのような機会だったか。それは、人々がみずからも旅に出、その辛さ・寂しさを切実に体験した時にほかならなかったであろう。そして、その旅の追体験の感銘を端的に表白し得るよすがが、歌であった。

麻續王流二於伊勢國伊良虞嶋一之時人哀傷作歌

うち麻を麻續の王海人なれや伊良虞の島の玉藻刈ります

（1・二三）

麻續王聞レ之感傷和歌

うつせみの命を惜しみ波にぬれ伊良虞の島の玉藻刈り食す

（1・二四）

荒栲の藤江の浦にすずき釣る海人とか見らむ旅行くわれを

（3・二五二　柿本人麻呂　前掲①中）

島隠り吾が榜ぎ来れば羨しかも大和へ上る真熊野の船

（6・九四四　山部赤人）

鳥じもの水に浮きゐて沖つ波さわくを聞けばあまた悲しも

（7・一一八四　前掲⑤中）

鴨じもの浮寝をすれば蜷の腸か黒き髪に露ぞ置きける

（15・三六四九）

◇

苦しくも降り来る雨か神の崎狭野のわたりに家もあらなくに

（3・二六五　長忌寸奥麻呂）

いづくにか吾は宿らむ高嶋の勝野の原にこの日暮れなば

（3・二七五　高市黒人　前掲②中）

大葉山霞たなびきさ夜ふけてわが船泊てむ泊知らずも

（7・一二二四　前掲⑤中）

神の崎荒石も見えず波立ちぬ何処ゆ行かむ避道は無しに

（7・一二二六　前掲⑤中）

照る月を雲な隠しそ島かげにわが船泊てむ泊知らずも

（9・一七一九　春日蔵）

磯ごとに海人の釣舟泊てにけりわが舟泊てむ磯の知らなく

（17・三八九二　前掲⑧中）

家にてもたゆたふ生命波の上に浮きてし居れば奥処知らずも

（17・三八九六　前掲⑧中）

◇

玉はやす武庫の渡に天伝ふ日の暮れゆけば家をしぞ思ふ

（17・三八九四　前掲⑧中）

大海の奥処も知らず行くわれを何時来まさむと問ひし子らはも

（17・三八九七　前掲⑧中）

鄙にいる身の上をわび、あてどもない心細さを吐露する。またその安らかならぬ心を、ひたすら家郷を思うことで支えようとする。(7) このような心の動きは、たしかに現実の旅の緊迫感からもたらされたものにちがいない。が、なおその現実の旅の状況を越えて、人々に働きかけたものがあった。それは、貴種の旅の悲哀を伝える物語によって培われた、旅に対する心意の偏向であった。そしてそれが、万葉びとに、旅の明暗のうち「暗」の面を強調した歌をつくらせたのだと結論したい。

さらに言えば、みずからが旅人であることを強く意識すること、これが万葉羈旅歌の基本精神であったと思う。遠き世の神々、あるいは近き世の貴人達の旅の系譜に、いま現実に連なっている自己を意識する。旅にまつわる豊かな伝承を、現実感のなかで再生し、作歌の素地とする。万葉羈旅歌の文学としての水準の高さは、このような状況のもとに収獲されたものではないだろうか。

五

ここまでの考察をふまえて、再度、「羈旅」の語の用例をふり返ってみたい。すると「羈=旅邊城」（④）「悲=傷羈旅」（⑧）といった用い方が、改めて注目されてくる。辺土をさすらい、悲傷すべきものが「羈旅」であった、と察してよかろう。

因みに『万葉集』の歌には、単独に「羈」一字で「たび」と訓ませた例が十例ほどある。が「羈旅」と二字連ねた場合、その熟語は、単なる「たび」の意味を越えて使用されたものと思われる。臆測になるが、この熟語を「たび」とは和訳せず、編者などは「キリョ」と音読みして、特殊な陰影を感じていたのではあるまいか。ともあれ、「羈旅」の語自体に意味の偏向があったとすれば、「羈旅歌」と題された歌が或る傾きをもってくるのは、当然ということになろう。

ところが、今までの論旨に沿って考えると、『万葉集』の旅の歌の本質は、むしろ「羈旅歌」という語の標榜するものに一致してくる。もちろん、行幸従駕歌などは、性格的に旅の歌の主流からは外れると見なし得る。その点、「万葉集の旅の歌全般を羈旅歌と称するのは、今日の研究者の便宜である」という見解は改めなくてよいと思う。がしかし、「広く旅の歌の題としての通用性は有していなかった」との把握は、もう一度考え直してみなければなるまい。行幸従駕歌の題詞に「羈旅」の語がはいらないのは納得できる。が、陰影を帯びた旅の歌の題には、作者・制作事情不明の歌などに限定されることなく、もっと広く使用されてもよかったと思うのである。

実際、そのような兆候は、わずかながら現れている。柿本人麻呂の羈旅歌八首（①）・高市黒人の羈旅歌八首（②）がそれである。まず題詞の体裁からして、一章で触れたように双方異例であるうえに、①などは、歌の配列の仕方に或る文芸的意図があるようにも印象される。[8] なかでも、畿内外の境界・明石で制作された有名な二首に注目したい。

ともしびの明石大門（おほと）に入らむ日や漕ぎ別れなむ家のあたり見ず
（3・二五四）

天離る鄙の長道ゆ恋ひ来れば明石の門より大和島見ゆ
（3・二五五）

「羈旅」に対する人々の感概を象徴するような二首である。このような好対照の二首が隣り合わせになっているあたり、何か意図的なものを感じないではいられない。②にしても、六首目あたりまでは、詠地はさまざまだが、水上漂泊の孤愁を感じさせる歌を並べている。連作的効果をねらっての配列と見られないこともない。

人麻呂・黒人にこのような「羈旅歌八首」があるならば、同様にして、たとえば赤人や家持に「羈旅歌」があっても不思議はなかったのではないか。

そこで私案では、次のように考えてはどうかと思う。「羈旅歌」はすでに十分な文芸意識のもとに、有力な分題標目の一つとして成長してゆく萌しをみせながら、なお、旅の歌自体が或る制約から解放されていなかった。すなわち、編者が純粋な文芸として扱いきれない制約が、旅の歌にはあったのだと。

その制約とは何か。それは制約というより、旅の歌が宮廷に集められた時の、意義の変質という見方で説明し得るのではないかと思う。折口信夫が『日本文学の発生　序説』「大嘗祭の本義」（『古代研究　民俗学編2』）その他で繰り返し説くところによると、天子が諸国を領有する証しは、信仰的には、諸国の神々の名を知り、その霊魂（国魂）を身体に付着することであった。それは、国魂を籠めた歌の奏上によって為された。そして国魂は、地名に籠っていた。諸国の地名の知識が宮廷に集中する意義は、このような古代信仰の見地から理解される、というのである。

ここで羈旅歌の骨格の第一に、地名の保有という点があげられることを想起したい。すると、地名を保有した羈旅歌が宮廷に入ること、それは国魂奉献という意義を有していたと考えられるであろう。それが、旅の歌の宮廷に保管される大切な理由であったとすれば、つまり旅の歌の価値は、宮廷にとっては地名にあったとすれば、「羈旅歌」という分題標目が、素質をもちながら未成熟に終った事情も、解明の手がかりが得られると思うのである。

そういえば、文芸的な編集態度の仄見える人麻呂・黒人の羈旅歌八首も、非常に高い確率で地名を含んでいる。人麻呂のそれは百パーセント、黒人のそれも七首までが確実に固有名詞を含んでいる。しかも、一首に二つの地名が含まれた例も少なくない。

山村金三郎氏は、黒人の羈旅歌八首中の、

四極（しはつ）山打越えみれば笠縫の島こぎ隠る棚無し小舟（3・二七二）

という歌が、殆ど同じ形で『古今集』巻二十、大歌所御歌に「しはつやまぶり」として採られていることに注目されている。そこから山村氏は、この八首中の何首かは、何天皇の大嘗祭の風俗歌としてうたわれたかは明言できないが、その種の宮廷行事に関連した作品であった可能性が高いのではないか、と推測された。[9]

これは興味深い視点である。黒人の八首中には、近江の国で詠まれたものが三首ある。地名としては、「磯の崎・八十（野州）の港」[10]（二七三）「比良の港」（二七四）「高島の勝野の原」（二七五）が詠み込まれている。これらの土地が所属する野州郡・滋賀郡・高島郡は、『江家次第』によると、平安朝にはいずれも悠起田ト定地であったことが知られる。また、

桜田へ鶴鳴きわたる年魚市潟潮干にけらし鶴鳴きわたる
（二七一）

という名高い歌がある。ここにみえる地名は、現名古屋市熱田付近と推定されている。作歌年次・機会は不明である。或いは、巻一に大宝二年三河行幸時の黒人の歌があるから（五八番歌）、その折の副産物かもしれない。が尾張での詠ということに着想すると、或いは次の記事との関連が考えられないだろうか。

○（文武二年十一月）己卯大嘗。……賜ニ神祇官人及供レ事尾張美濃二國郡司百姓等物一各有レ差。――『続日本紀』

「悠起」「主基」と明記されてはいないが、その明記のある後代の大嘗祭の記事の書式と対照すると、尾張が悠起国、美濃が主基国を務めたと推定される。すなわち、文武天皇大嘗祭の折の悠起国が尾張であったことと、二七一番歌との間に、何らかの連絡はないだろうかということである。もっともこれは、今のところそれ以上を探る手がかりもないが、実は人麻呂の羈旅歌八首も、同様の示唆を含んでいる。八首に含まれた地名とその所属国名を順に挙げていくと、次のようになる。

二四九　御津の崎（摂津）・奴島（？）
二五〇　敏馬（摂津）・野島の崎（淡路）
二五一　野島の崎（淡路）
二五二　藤江の浦（播磨）
二五三　印南野（播磨）・加古の島（播磨）
二五四　明石大門（播磨）
二五五　明石の門（播磨）
二五六　飼飯の海（淡路）

播磨国を中心とした近隣一帯の地名が集まっているが、実は持統天皇大嘗祭の折の悠起国が播磨であったと推定される。

○（持統五年）十一月戊辰、大嘗。……丁酉、饗ニ神祇官長上以下、至ニ神部等一、及供奉播磨因幡國郡司以下、至ニ百姓男女一、并賜ニ絹等一、各有レ差。――『日本書紀』

持統五年といえば確実に、宮廷歌人としての人麻呂の活動期に当る。これもそれ以上を探る手だてこそないが、暗合があると思っておいてもよいのではないか。少なくとも人麻呂の旅の内容が、地名採訪の旅であったというような可能性は、想定されてよいであろう。[11]

小稿では十分に考察を尽せないが、こうして、宮廷歌人の旅の歌と宮廷儀礼との関連は、もし数多くの徴証が集まって来れば、きわめて興味深い論点となるにちがいない。

さて、本章の主旨は、地名の持つ古代性が、「羈旅歌」という分題標目を成熟させなかったのではないかということにあるが、周知の通り、「羈旅」という部立は『古今集』以降の勅撰集で成立する。最後に、八代集の「羈旅」の巻の歌の地名保有度について調べ、万葉集の「羈旅歌」との比較材料としておきたい。以下に示す数字は、地名保有歌と判断した歌の数の、羈旅歌総数に対する割合である。[12]

○古今集……一九・五％（8／41）
○後撰集……三三・三％（6／18）
○拾遺集（「別」の巻）……二六・四％（14／53）
○後拾遺集……五二・八％（19／36）
○金葉集（「別離」の巻）……二四・〇％（6／25）
○詞華集（「別」の巻）……二六・七％（4／15）
○千載集……四四・七％（21／47）
○新古今集……四四・七％（42／94）

『万葉集』で「羈旅歌（作）」の標題のもとに集められた歌は一〇九首。そのうち地名保有歌は八二首である（七五・二％）。どうやら『古今集』で「羈旅」の部立が成立した時、羈旅歌は、『万葉集』のそれとはすっかり変質してしまっていたといえるようだ。その後『千載集』『新古今集』に至って、本来の羈旅歌の姿を回復しようとした形跡がみられるが、それでも万葉羈旅歌における地名の比重には及ぶべくもない。まさに地名は、万葉羈旅歌の生命標だったのである。

注

1 第五句「水手」を文字通り水夫と解し、一首を水葬挽歌とみる説があるが（土屋文明氏『私注』）、「この一句だけでさう解するのは少し無理であらう」（沢瀉久孝氏『注釈』）と判断して「水手」は鹿子の借字とする見解に従いたい。

2 「万葉集羈旅歌の世界」（『論集上代文学　八冊』）

3 「巻七羈旅歌抄」（『万葉集を学ぶ　第五集』）

4 「伝説歌の源流」（『国語国文』昭和三九・三）

5 池田彌三郎氏『万葉びとの一生』『高市黒人・山部赤人』・西村亨氏『歌と民俗学』『旅と旅びと』・土橋寛氏『古代歌謡と儀礼の研究』古橋信孝氏『万葉集を読みなおす』など。

6 池田彌三郎氏の命名。（『芸能の流転と変容』参照）

7 神野志隆光氏の「行路死人歌の周辺」（『論集上代文学　四冊』）・伊藤博氏の「家と旅」（『万葉集の表現と方法　下』）は、旅人にとっての「家」（とくに「妹」）の意義を探った論考として学ぶべきところが多い。

8 八首に秩序ある構成の跡を探った論考として、村田正博氏の「柿本人麻呂が羈旅の歌八首」（『和歌文学研究』三四）・都倉義孝氏の「羈旅歌八首」（『柿本人麻呂・古代の文学2』）などがある。しかしこの立場には批判も少なくない。私見でも、意図的なものが印象されるという程度で、整然とした構成をうかがうには無理が多いと考える。

9 『近江路の万葉』

10 磯・八十を固有名詞と認定するのは、池田彌三郎氏の『高市黒人・山部赤人』の説に従った。

11 井口樹生氏の「鹿鳴譚の由来――古代・鹿の文学と芸能――」（『金田一春彦博士古稀記念論文集　第三巻』）に、万葉時代の地名拾集についての考察がある。

12 たとえば「東路（あずまぢ）」「難波人」なども該当例として数に入れた。このような作業においては、固有名詞と認定するか否か、問題を含む歌をめぐって、人によって計算に若干の差が生じてくるものと思うが、ここでは概数がわかればよいという態度で調査をおこなった。